

息苦しさから解き放ってくれたN.Y土産のモンロー・タイツ

5 歳まで伊東市で育った志茂田景樹さん。その後父親の転勤で東京に移ったが、小学生時代は夏冬の休みをよく伊東で過ごしたという。「宇佐美の浜で地引き網を手伝うと、バケツ一杯のムロアジをもらえました。翌朝、その一夜干しが食卓に乗る。あの味を覚えると、もう東京の干物なんか食べられたもんじゃない」。今年76歳を迎える志茂田さんに、生まれ故郷はしっかり根を下ろしていた。

志茂田景樹の名を聞いて連想するのは、まず直木賞作家。そしてその奇抜ないでたちだろう。しかし、最初からカゲキだったわけではない。大学卒業後、職業を転々としながら小説を書き始め、40歳で厳しい掟に生きるマタギを描いた「黄色い牙」で直木賞受賞を果たす。その後も、ユーモア推理小説や、歴史小説など人気作品を発表するが、社会からの注目に志茂田さんは次第に息苦しさをを感じ始めていたという。「心が重

い。もっと自分を解放できたら楽になれるのに、出口が見つからず悩んでいました」

ある日、ニューヨーク帰りの知人からアンディー・ウォーホルのカラフルなモンローがズラリとプリントされている女性物のタイツを手渡された。原稿の



締め切りに追われてホテルに缶詰めになっていたとき、志茂田さんは何の気なしにそのタイツを履いてみたところ心がスッと軽くなったという。ジーンズを短く切った即席の短パンとお気に入りのTシャツを合わせて、直木賞作家はそのまま街に出た。

「すれ違う女性たちが目を丸くして笑っている。サラリーマンたちは、

ギョッとして目をそらす。ズンズン歩いていくうちに周りの視線はだんだん気にならなくなり、なんだめい心地良くなってきたんです」。プロ作家としていつのまにか背負い込んでいた、不安や虚栄、傲慢(ごうまん)な気分から解き放たれていくような心地良さ。志茂田さんはそのまま銀座まで歩き続け、なじみのバーでは大いにうけた。この体験が今に続くカゲキ・ワールドの幕開けだった。

「カゲキな文化人」をテレビが放っておくはずもない。分刻みのスケジュールの合間の一服がその頃の気分転換の時間だったという。「火をつけると始まる、ちょっとぜいたくな時間。固まっていたものがすうっとほぐれていく感じが心地良かった」と志茂田さん。今でも酒席で愛煙家が隣に座れば、会話と一緒に紫煙も楽しむという。「大人として場をわかまさえすれば、人の楽しみ方はそれぞれあっていいと思うし、ルールをがちがちに当てはめる考え方は好きじゃない」

PERSON:
しもだ かげき
志茂田 景樹
作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長
本名・下岡 照典。1940年3月28日
伊東市生まれ。中央大学法学部卒業。
2000年に運慶を迎えて自ら新0歳と
称し、今年「16歳」を迎える。好きな
言葉は「ゆっくりと、かしこく行う」

志茂田景樹ツイッター
https://twitter.com/kagekineko?lang=ja

カゲキで真摯な自然体 志茂田景樹という生き方



寄せられる相談にはすぐに返事をするという(都内事務所で)

読み聞かせ隊、ツイッター人生相談。どこまでも生真面目な素顔

い ま、志茂田さんは作家のほかに、二つの顔で活発に活動を行っている。一つは読み聞かせ。あるサイン会で親子を前に即興で絵本や童話を朗読してみた。「子どもたちはすぐにお話の中に吸い込



幼稚園での読み聞かせの様子(2003年 浜松市)

まれる。大人たちもシーンと聞き入っている。あらためて読み聞かせの力を認識した」と言う志茂田さんは、1998年に仲間と「よい子に読み聞かせ隊」を結成。隊長として、昨年末に全国で1,808回もの読み聞かせを行っている。

もう一つの顔は、ツイッターでの人生相談だ。フォロワーは約27万人にも上り、社会現象にもなっている。毎日全国から寄せられる悩み事や質問一つ一つに目を通し、丁寧に自分の思いを返す。

「読み聞かせでも、上から目線では相手の心には響きません。質問者と同じ目線に立ち、自分の言葉で答えるよう心掛けています」と、志茂田さんはどこまでも折り目正しい。

「今、時代が少しずつ息苦しくなってきたように感じます。多様なあり方を認めない雰囲気の中で、閉塞感やあせりを感じている働き盛りの大人が多いようです。申(さる)年の今年だからこそ、よく見てよく聞き、積極的に自分の考えを話してみましよう。だれもが自由を感じながら自然体で生きられる社会であり続けたいですね」



人生の転機をつくったモンロータイツ